

判 決

被告人 X1
被告人 X2

主 文

被告人X1を懲役14年に、被告人X2を懲役6年に処する。
未決勾留日数中、被告人X1に対しては180日を、被告人X2に対しては13
れその刑に算入する。

理 由

(犯行に至る経緯)

被告人X1は、平成14年11月ころから、広島県福山市d町所在の風俗店
きとホステスの送迎担当の従業員として稼働していたが、平成15年5月末
いた同店のホステスAと肉体関係を持ち、交際するようになった。被告人X1
強い恋愛感情を抱き、同女の娘も可愛がって、Aとの結婚まで意識していた
までの思い入れはなかった。

同年9月ころ、被告人X1は、Aが距離を置こうなどと言ってきたことから、同
付き合い始めたのではないかと疑うようになった。そして、ちょうどそのころか
頻繁に訪れて、その都度Aを指名し、プレゼントを渡すなどしていたため、被
に惚れ込んでいる様子のBの存在と行動を許し難いものと感じていた。被告
一ジャーから降格され、収入も減って経済的に困窮するようになって、何と
を取り戻そうと、同女のために乗用車を入手したり、必死に工面した金で同
る舞うなどしていたが、Bは、同年12月6日に、Aと被告人X1が系列店に移
店を訪れてAに高価なものをプレゼントするなどしていたため、被告人X1は
対する怒りを強めていった。

同月12日夕方、Aから被告人X1に対し、突然仕事を休む旨連絡があり、
被告人X1は、Aの家に行って様子を見ようとしたところ、その道中AとBが一緒
にしているのを目撃し、2人の交際を知って愕然とするとともに、自分からA
しているBに対する憎しみを募らせ、さらには、BさえいなくなればAと将来的
た、Bを殺して、Aと幸せに過ごしたいなどと考えた。その上で、被告人X1は
を殺すのは無理であるから、誰か仲間を作ろうと思い、そのころ、同じ店で客
た被告人X2に対し、右翼のことをぼろかすに言うC党の者を殺したい旨言っ
伝いを頼んだところ、被告人X2は、「殺す」と言っても半殺しの程度で終わる
自分は手伝いをしていればいいなどと軽く考えて、被告人X1の頼みを了承
被告人両名は、仕事の合間に、殺人の方法等を話題にした。

同月14日午後9時ころ、被告人X1は、客引き中の被告人X2に対し、今か
を確保しに行く旨告げて、Bの行きつけのパチンコ店に赴き、同店駐車場に
れる車を発見したことから、待ち伏せをするとともに、被告人X2に対し、対象
で指定の場所で待つように指示した。そして、同日午後10時ころ、被告人X
乗り込んで発進するのを確認すると、その後を付け、Bが車を停めて弁当屋
被告人X2に連絡を入れた後、店から出てきたBに話があると声をかけて、目
に乗車させた。被告人X1が、同車内で、Bに対し、Aとの関係を問い質した
度もAと店外で会っている旨答えたため、被告人X1は、Bに対する憎しみを
中で被告人X2を車に乗せた後、被告人X1の自宅に向かったが、Aにとって
に過ぎず、恋愛感情はないのかもしれないという望みを捨てきれず、自宅に
告人X2を先に部屋に向かわせた上、Bに対し、Aとホテルに行った時には、
るのかと尋ねてみたところ、Bから、3回目の時にはお金を払おうとしたがい
た、Aが自分を好きだからそうしたのだと思う旨言われてしまった。これを聞
みも断たれたと思った被告人X1は、Bを許せないと憤って、同人を殺害する
中で話そうなどと言って、被告人X2が待つ自室にBを誘い入れた。

(罪となるべき事実)

第1【平成16年12月8日付け起訴状公訴事実】

1 被告人X1は、平成15年12月14日午後11時ころ、広島県福山市e町
g号室の当時の被告人X1方において、B(43歳)を殺害しようと決意し、Bの
頸部に腕を巻き付けて絞め上げ、これを目の当たりにした被告人X2は、被
場に至るまでにした言動からその意を察し、かくなる上は、被告人X1を助け
うと決意し、ここに、被告人両名は、共謀の上、Bを殺害しようと企て、被告人

(1) 平成16年1月30日、判示第1の2記載の通称映画村において、白骨等が発見され、鑑定作業を経て、同年7月ころ、被害者の身元が判明し、その友関係等の捜査が進められた。そして、遅くとも同年10月21日までは被Hら関係者からの事情聴取が行われ(検149)、同年11月1日には、本件当人兩名を映画村等に案内したIの引き当たり捜査が実施されている(検170)。

(2) 捜査当局は、被告人X1が、被害者が所在不明となる直前ころに出入りした風俗店の関係者であり、本件死体遺棄に関与しているものと窺われるとして、実際に起訴後の勾留中であった被告人X1について、平成16年10月27日、検170を実施し、同検査では映画村の死体等に関する質問がなされた。併せて被告人X1に対し、被害者との面識や関係、被害者が上記風俗店に出入りして行ったこと、被害者が所在不明になる理由などについての取調べを開始した。被告人X1は、取調べにおいて、あえて被害者のことを避けるかのような供述に終始した。検察官は、同被告人に対し、あったことはあったこととして話すべきではないかを諭すように再三にわたり申し向けた。

同年11月1日の取調べ時において、取調べ警察官が、被告人X1に対し、供述を促す旨を申し向けたところ、被告人X1は、一点を見据えて沈黙し、時々くなどして深く考えこんでいたが、取調べが深夜に及ぶおそれがあるため、取調べは打ち切られた。そして、翌2日午前中に取調べが再開されると、被告人X1は雑談の後、取調べ警察官に対し、深々と頭を下げるなどした後、「申し訳ありません。私にやらせていただきました。」と言って本件殺人、死体遺棄についての自供をした。その後、その犯行内容を自ら記述した上申書(検273)を作成した。

2 以上のとおり、被告人X1は、捜査機関の取調べにおいて、本件殺人、死体遺棄に関与を質され、繰り返し供述を促された結果、本件殺人、死体遺棄について自供をしたものであり、捜査機関に対し、自発的に犯罪事実を申告したと認められる。

したがって、判示第1の各事実について、被告人X1に自首は成立せず、自首は採用できない。

(法令の適用)
省略

(量刑事情)

本件は、被告人X1が、思いを寄せる女性を奪われたとして被害者に憎しみを持ち、被告人X2にその手伝いを求めて、同被告人と共謀の上、被害者の頸を絞めて死体遺棄を通称映画村敷地内に放置して遺棄したという殺人及び死体遺棄の事実(判示第1、2)、被告人X1が勤務先の送迎用車両を乗り逃げした業務上横領の事実(判示第3)がある。

殺人及び死体遺棄の事案についての犯行に至る経緯及び動機は、前示のとおりである。被告人X1は、勤め先のホステスに恋い焦がれる余り、やはり同女に思いを寄せ、その交際を深めていた被害者への憎しみを募らせ、さらに、同女が、店の外で待っているのを目撃した時から、同女の殺害を考えるようになり、最後は、同女と恋愛関係があることを窺わせる被害者の発言を聞いて、殺意を固め、本件犯行に至ったのである。被害者は、被告人X1と上記ホステスの関係について何も知らされず、被告人X1の一方的な怒りの矛先を被害者に向けた挙げ句、同女を殺した。被告人X1は、誠に短絡的かつ冷酷というべきであって、その経緯及び動機に酌量されるべきである。被告人X2は、被告人X1から真相を知らされていなかったために、被告人X1の安易に了承して行動を共にした結果、本件殺人等に巻き込まれてしまったと認められる。被告人X2においては、面識もなく素性も知らない被害者を殺害する動機は、いかなるものでもなく、殺人という重大犯罪に加担する選択をしたものである。被告人X2は、人命軽視が甚だしいといわざるを得ず、これまた経緯及び動機に同情すべきでない。

本件殺人の態様は、被告人X1において、被告人X2が待つ自室に被害者を呼びよせ、いきなり、被害者の背後から頸に片腕を巻き付け、反対の腕を交差させて引き付け、続いて、被害者に正対した被告人X2において、被告人X1の両腕を握り、更に絞め上げたり、被告人X1の腕を掴んでいる被害者の腕を持ってその腕を全に排除するなどし、その間、被害者が息絶えたと思われる後も、被告人X1は、被告人X2と一緒に、被害者の死体を映画村敷地内に持ち出し、放置した。被告人X1は、被告人X2と一緒に、被害者の死体を映画村敷地内に持ち出し、放置した。被告人X1は、被告人X2と一緒に、被害者の死体を映画村敷地内に持ち出し、放置した。被告人X1は、被告人X2と一緒に、被害者の死体を映画村敷地内に持ち出し、放置した。

また、本件死体遺棄は、犯行発覚を防ぐために、裸にした被害者の手足を

縛り、遺体をゴミ袋で包んだ上から更にガムテープで巻き、被告人X1使用車内、人気のない通称映画村付近の放置車両のトランク内と、より発覚の困難度も移動させ、最終的に映画村敷地内に塀から投げ入れて遺棄したもので遺体を物同然に扱った非情な犯行というべきである。

被害者は、ホステスの許に通うようになって暫くしたところから、被告人X1に感じるようになっており、ホステスに対し、「殺されるかも知れない。」「自宅があるので帰りたくない。」などと訴えていた。また、被害者は、被告人X1との通う風俗店の従業員というのみでそれ以上のものは全くないにもかかわらず自分に対して憎しみを顕わにすることが理解できず、ホステスに対し、被告人X1を確認したこともあった。このように、被害者は、被告人X1の影に怯えていた。相手から突然同行を求められて自宅に連れ込まれた上、抵抗らしいことをせず殺害されたもので、その間の恐怖、絶望感には多大なものがあつたと認めらる。被害者は、うら寂しい場所に長期間放置されて、白骨化した無惨な姿で発見なのであるから、その無念さは察するに余りある。尊い生命を奪った犯行の結果というほかなく、被害者の帰りを待ちわび、凶報に接した後も事実を受け容れていた被害者の母をはじめとする遺族の悲嘆は深く、実兄の意見陳述からいかに、遺族の処罰感情には極めて厳しいものがある。にもかかわらず、被告人X1的な慰謝の措置を何ら講じていない。

被告人両名の役割の軽重をみると、前示のとおり、本件殺人は被告人X1というべきものであつて、当然、積極的かつ主導的役割を果たしたのも被告人X1の責任は、被告人X2よりも数段重い。とはいえ、被告人X2も、殺人の実行など軽視できない役割を果たしている上、本件死体遺棄については、むしろ舞っており、被告人X2の責任にも相応に重いものがある。

さらに、被告人X1による本件業務上横領も、身勝手な犯行であつて、犯情以上の諸事情に照らせば、本件の犯情は誠に悪質であり、被告人両名の責任は大といわなければならない。

しかしながら、被告人両名は、捜査段階から一貫して素直に犯行を認めており、公判廷において謝罪と反省の態度を示していること、被告人X1につき2にかかる被害車両の被害回復が見込まれること、前科がないこと、被告人X1は、上記の役割の比較に加え、前述のとおり、被告人X1の虚言を交えた誘行に巻き込まれた側面もあること、遺族にあて謝罪の手紙を出し、後悔の念を示していること、前刑の執行猶予が取り消され、併せて服役することなど、被告人X2の酌むべき事情が認められる。

そこで、諸般の事情を総合考慮し、被告人両名に対しては、それぞれ主文のとおりとするのが相当であると判断した。

(被告人X1につき求刑懲役15年)
(被告人X2につき求刑懲役8年)

平成17年5月18日
広島地方裁判所福山支部

裁判長裁判官 加藤 誠

裁判官 中島経太

裁判官 荒木美穂